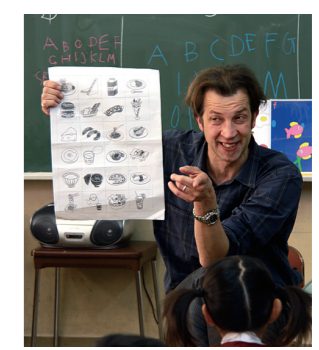


# 小学校外国語活動



浦小学校に勤務。もともと英語が好きだったこともあり、外国語活動に対して前向きにチャレンジしたいと頑張っています。

羽ノ浦小学校 教諭 四宮 桜さん

## 子どもたちとともに チャレンジ

いよいよこの春から、5・6年生における外国語活動が本格的にスタートします。阿南市では、これまでも担任による外国語活動に取り組んでおり、私も昨年4月から5年生を担任して、1年間子どもたちと外国語活動を楽しみました。

外国語活動を行う子どもたちの姿は、笑顔でとても生き生きしています。それは、画面から音声や歌が流れるデジタル教材を使っているということもあり、歌やゲームなど楽しい活動が多いこともあります。しかし、何より子どもたちが楽しんでいるのは、友達とコミュニケーションを図ることができるところです。

## 新学習指導要領における小・中学校の目標を比較

### ●小学校外国語活動の目標

- 外国語を通じて
- ①言語や文化について体験的に理解を深め、
  - ②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、
  - ③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

### ●中学校外国語の目標

- 外国語を通じて
- ①言語や文化について理解を深め、
  - ②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、
  - ③聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

## 目標の違いと教育のつながり

小・中学校の目標の違いをみると、小学校では「体験的に」とあります。教科書を使わない外国語活動では、「聞くこと」「話すこと」を中心にゲーム、歌、簡単な会話などを通じて外国の言語や文化に触れます。また、中学校では「基礎を養う」とあり、4技能の定着を求めているのに対して、小学校は「慣れ親しみながら」と外国語の定着を求めています。小学校では外国語の技能を身につけることが第一ではないことがわかります。

## 小学校外国語活動は 中学校英語教育の前倒しではありません

新学習指導要領では、外国語活動の目標は「外国語を通じ、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、コミュニケーション能力の素地を養う」となっています。つまり、会話表現や文法などの英語のスキル(技能)を身につけさせることを第一の目的にしているという事です。小学生の柔軟な適応力を生かして、あえて母語でない外国語にふれることで、人と言葉のやり取りをする楽しさを味わうことができます。相手の言うことが分かって、自分の気持ちを通じたとき、子どもたちは喜びを感じます。そんな



昨年8月に開催されたの研修会のようす。



文部科学省 教科調査官 直山 木綿子さん

8月9日、阿南市で開催された小学校外国語活動研修会で、新学習指導要領の趣旨に沿った外国語活動の授業のやり方や教材の工夫の仕方などを解説。中学の英語教師を15年、指導主事6年歴任され、平成21年4月から文部科学省の教科調査官として、全国の教育委員会や小学校などを回られています。

体験がコミュニケーション能力の素地となるわけです。たくさん英単語を覚えさせ「聞く、話す、読む、書く」技能習得に先走るとは、英語嫌いな子どもを増やすことにつながりかねません。文法や知識は中学校へ進んでから、きちんと学ばなければいけません。「英語に慣れ親しみ、言葉を楽しむ」を旨とするという趣旨を、まずはきちんと

理解しておく必要があります。外国語活動は、数学や国語といった教科ではありません。「総合的な学習の時間」と同じ扱いで、教科書もなければテストもなく、成績や順位もつけません。しかし、小学校で養われたコミュニケーション能力の「素地」は、中学校では「基礎」、高校では「能力」を養うと、段階的にコミュニケーション能力の向上につなげていくことをめざしています。

今後は、小・中学校で連携を深め、英語の音に慣れ親しんだ子どもたちが、文法や知識の学習にスムーズに入っていけるよう努める必要があります。平成24年4月からは中学校における英語教育の授業数が1時間増し、教科の中で最も多くなります。小学校での楽しい経験が、将来の外国語習得につながっていくのです。



答えは英語で！ブラックボックスクイズに挑戦。



阿南中学校  
校長 野村 誠也 さん

26年間、英語教員として勤められた野村先生。平成21年4月からは、阿南市中学校教育研究会英語部会で係校長として、会員とともに中学校英語教育の研究を進めてきました。

## 英語好きの子どもたちに期待

小学校での英語活動が「総合的な学習」の中で認知されたのが、2002年度でした。以後、全国のほとんどの小学校で英語活動が実施され始め、その必修化を望む保護者の声も多くなってきました。

専門家の中では、小学校では国語や道徳の方が大切だから：ということ、英語活動の導入に反対の議論もありました。しかし、国際的な視野に立ってみると、外国語の学習が12歳からというのは少々遅く、10歳には始まっている国が多くなっているのです。これからは国際化が進む社会を生きていく子どもたちが、小学校高学年からの授業で英語に親しむ機会を得られたことは、国際理解の推進という観点からも望ましいことだと思います。

小学校での英語活動は、文科

省から配布された「英語ノート」を基礎資料としながら、CDやICT教材(電子黒板用ソフト)等を活用し、ますます楽しい授業が展開されることでしょうか。みんなで英語でのコミュニケーションを楽しむことがねらいであり、テストをしなくても、多くの子どもたちが「楽しい」「待ち遠しい」と感じている理由かも知れません。

さて、中学校英語になると「さあ、書いてみましょう」「覚えていきますか？」などの言葉が先生から出ます。テストでの評価も始まります。しかし、文字での表現能力やその定着度が少しずつ求められるようになってきた時に、小学校で親しんだ英語が、子どもたちの英語力の基礎を支えてくれるので、中学校ではさらなる飛躍が期待出来ると考えています。

## 「柔らかな心」という宝物を生かして

今から18年前、私はアメリカ・フロリダ州の小学校で、日本文化を教えるインターン活動をしました。様々な体験の中で、生涯の友となる先生の言葉が忘れられません。

「アメリカと日本、国民レベルで交流し理解すべき。万一、戦争になったら、友である両国民で戦争を阻止できる。」この彼女の考えは、今も私の大きな土台です。

小学6年生の娘がいる保護者として、小学校の外国語活動を歓迎します。小学生には、「柔らかな心」という宝物があるからです。

子どもは、ものまねが得意です。パソコン操作も大人よりいち早く覚えます。興味ある対象物とならば、積極的に身につける力がある証拠です。小学校高学年となると思春期の入り口になり、少し気難しくなりますが、

外国人の生活ぶりや食べ物に相違を見つけることでしょうか。ぜひ、自分との違いを楽しんでもらいたいです。

私は、公立中学校の臨時英語教員の経験はあるのですが、保護者の立場からこの活動を理解すべく、昨秋、鳴門教育大学で講習を受けました。英語圏以外の国も学べるよう楽しく工夫されていて、私も今の小学生になりたいぐらいです。しかし、現場の先生方の負担が増すとも思いました。家庭でできることは、「子ども先生」とともに、保護者世代は知らない小学生ならではの英語を楽しんでいきたいです。「以心伝心」の文化の日本ですが、現代は、思いやりある言葉をお互い理解することが大切なのではないかと思えます。小学校外国語活動が、世界の人々の笑顔につながることを願います。



小学6年生の保護者  
佐藤 礼子さん (桑野町)

中・高校の教員免許を持ち、英会話学校の講師や塾の経営といった経歴を持つ佐藤さん。小学6年生の保護者として、小学校外国語活動の導入に関心を抱いています。



夏休みの小学校英語教室でジェスチャーゲームを楽しむようす。

外国人講師の授業も楽しい。

いろんな国の言葉で挨拶。

ALTのギャリー・オーエン。



この有名人を知っていますか？ 電子黒板も使って楽しい授業に。

ABCD…みんなで競争。

これを英語で答えてね。

これ、な〜んだ！

ハ〜イ！あなたの誕生日は？

## 諸外国における英語教育の実施状況

| 調査項目                 | 外国語としての英語教育の実施状況                     |  |  |   | 第2言語としての英語教育の実施状況                             |                                  | 日本                           |
|----------------------|--------------------------------------|--|--|---|---|----------------------------------|------------------------------|
|                      | 中国                                   | 韓国   | ドイツ  | フランス  | シンガポール  | インド                              |                              |
| 初等教育段階における外国語教育の導入時期 | 2001年                                | 1997年  | 2004年  | 2005年   | 1970年代～<br>全教科の授業を英語で実施                       | 1830年代～<br>(英国植民地時代)             | 2011年                        |
| 外国語教育の開始学年           | 小学校<br>第3学年                          | 小学校<br>第3学年                                  | 小学校<br>第3学年  | 小学校<br>第1学年<br>(2008年から)                          | 小学校<br>第1学年～                                  | 全35州・連歩直轄領のうち26州・連邦直轄領で<br>第1学年～ | 第5学年～                        |
| 小学校段階における外国語教育の授業時数  | 週4回以上                                | 年間34週<br>・3～4年は週2コマ<br>・5～6年は週3コマ<br>※1コマ40分 | ・週2コマ<br>※第5学年以降は中等教育                                | ・年間54時間<br>※第6学年以降は中等教育<br>・1コマ45分                | 北京語、マレー語、タミール語以外の授業は、すべて英語で行う                 | ・1日30分                           | ・週1コマ<br>(年間35時間)<br>※1コマ45分 |
| 各学校教育段階における外国語教育の目標  | ○単純な知識の伝授から全面的な素養向上へ<br>○コミュニケーション重視 | ○英語に対する興味・関心<br>○日常生活で使用する基礎的な英語を理解し、表現する能力  | ○生徒が卒業後実際の仕事や生活で使う実用的な英語コミュニケーション能力(聞く・話す能力)の養成を最重要視 | 「共通基礎知識技能」の1つ以上の現代外国語の習得」を掲げる。<br>○小学校：CEFRのA1レベル | ○効率的なコミュニケーション<br>○考える技能<br>○情報コミュニケーション技術の使用 | ○施政効率と国家の発展を目指すもの<br>○「総合力」の重視   | P15を参照                       |

※文部科学省「諸外国における外国語教育の実施状況調査結果(概要)」より抜粋

## 教科書も椅子も机も使わない？

外国語活動は4月から必須の授業となりますが、教科書のように決まった教材はありません。原則として文部科学省が作成した「英語ノート」やデジタル教材を補助教材として活用します。そして、ゲームや歌、簡単な会話など、学校ごとにオリジナルな授業が行われます。黒板に向かう対面的な授業ではなく、教室を自由に動き回る体験的な活動が子どもたちの学習意欲を高めています。

小学1年から4年生でも、年間8時間程度の外国語活動が行われていて、子どもたちは少しずつ英語に慣れ親しんでいます。



## 外国人講師も授業に参加

指導計画の作成や授業は学級担任が行うことになっています。また、ネイティブ・スピーカー(英語を母語として日常的に使っているALTや英語指導補助員)と一緒に活動することもあります。ALTとは、アシスタント・ランゲージ・ティーチャーの略で、児童や生徒にネイティブな発音に慣れ親しむために、市が学校に配属している外国人講師のことです。4月から引き続き4人のALTと2人の補助員が小・中学校を巡回して、外国語活動の指導にあたることになっています。

## 英語を学びたいと思える環境づくり

21世紀を生き抜くために国際的な視野を持ったコミュニケーション能力を育成するために導入された小学校の外国語活動。その一番の目的は、コミュニケーション能力の素地を養うことであって、たくさん英単語や文法を習得することではありません。もちろん、小・中・高等学校の外国語教育を通して英語力を伸ばそうとするねらいもありますが、小学生のうちから過度な期待を持つことは禁物です。子どもたちが「英語を学ぶことは楽しいな。中学校でも英語をもっと学びたいな。」と思える環境づくりが大切です。